

## シンポジウム②

『宋以前の古典を中心とした、正しい古典の認識とは』

座長：別府 正志

『傷寒論』は、押しも押されもしない中国医学のバイブルです。

では、皆さんが最もよくご覧になっている『傷寒論』を開いてみてください。その本のタイトルは何でしょうか？「え？傷寒論・・・でしょ？」。いえいえ、そんな事はありません。少なくとも表紙の表に誰かが手書きで書いた『傷寒論』という以外に、私はまともな古典で『傷寒論』とだけ書いてある本を見たことがありません。

ここで重要なのは、『傷寒論』はひとつではない！』ということです。現存している最も「ましな」『傷寒論』は、おそらく趙開美『仲景全書』所蔵の『宋板傷寒論』ですが、その最初のページには「〔翻刻宋板〕傷寒論」と書いてあります。「傷寒論」ではありませんよね。

もちろんこの本はそれでも「傷寒論」と書いてあるわけですが、実は「傷寒論」とは書いていない「傷寒論」も、たくさんあります。もともと「傷寒論」は、(実在したかはともかくとして)後漢の張機(仲景)なる人物が現したとされる『傷寒卒病論集』(傷寒雑病論、とされることも多い。本当は『張仲景方』、あるいはそれに似た名前かもしれません。)の一部です(これを「原傷寒論」と呼びましょう)。これは西暦210年ころの作とされ、すぐに散逸し、西晋の王叔和が再編しましたが再度散逸、北宋に校正医書局が三度再編したのが『宋板傷寒論』でしたが、これもまた失われました。現存しているいわゆる『宋板傷寒論』は、「北宋の傷寒論を見つけたよ」とその書籍の中で述べている明の趙開美の『翻刻宋板傷寒論』なわけですが、これも本当に北宋版そのものかと言われれば疑問が残ります。

つまり現代から遡れる一番古い「傷寒論」と名のついた『傷寒論』はせいぜい北宋、11世紀ということになるのですが、実は「原傷寒論」を引用した書籍は「傷寒論」と名のついたものばかりではないのです。ざっと述べてみますと、『脉経』、『備急千金要方』、『千金翼方』、『太平聖恵方』、『金匱玉函経』、そして日本の国宝『医心方』などに、原傷寒論からの引用がみられます。『宋板傷寒論』はそのうちのひとつ、というべきでしょう。

その様な視点でこれらの書物を通覧しますと、『宋板傷寒論』の異質さは非常に際立っています。このシンポジウムでは、この分野で世界的な研究をされている二人の先生にご登壇いただき、宋以前の傷寒論(もっと言えば中国医学)がどのようなものであったのか、各種文献を縦横無尽に通覧して解説していただきたいと思います。